伝えたい 戦後80年 過去から未来 記憶を語り継ぐ 3

学徒動員で名古屋へ　地獄のような空襲

有賀ひで子さん 96　辰野町赤羽

伊那町（現伊那市）上牧の農家に生まれました。伊那高等女学校（現伊那弥生ケ丘高校）に入学し、勤労奉仕で陸軍伊那飛行場で芝張りをしました。学校林の植林や根っこ掘りもし、重労働でした。

4年生になって昭和19（1944）年8月、学徒動員で名古屋の三菱重工（三菱重工業名古屋航空機製作所）に行きました。4年生270人が夜行列車で。名古屋に着いたらすぐに仕事。三小隊に分かれ、私は第一小隊で垂直尾翼を作りました。男の人たちが鋲（びょう）を打ち、それを抑える役。授業は全然なくて働くきり。名古屋は暑くて、あせもが体中にできました。食事は寮で作ってくれたが、今の肥料の豆かすの中にご飯粒が飛んでいるぐらいの粗末なもの。百姓で育ったから、食べられたものじゃありませんでした。

12月に大きな地震があってね。私らは仕事場が2階。埋立地だから余計に揺れるんです。「みんな外に出ろ」と言われ、やっとこさ外に出たんだけれど、地割れがひどい。それでも、揺れが収まったらすぐ仕事に戻りました。

その後、空襲がひどくなりました。寝るときもすぐ出られるように防空頭巾をかぶったまま、地下足袋を枕元に置いて。地獄でした。防空壕も、ただ土を掘ってあるだけのもの。そこに伏せていただけ。工場の屋根も空襲で全部、落ちちゃって。夜働いていた人もいたんですね。そういう人たちの肉が張り付いているんです、工場の鉄骨に。なんとも言えない…。がれきの中で仕事をしてね。上からの命令には絶対服従でした。

（名古屋大空襲では）B29が昼も夜もすごい来て、町の方へどんどん爆弾を落としました。夜は火の海でしたね、あのにぎやかな町が。そうすると風が起きるんです。焼野原になりました。あの中をよく生きて帰れたと思います。ただ、飯島米子さんだけが1人ね…。どうして外に出たのか。その時、工場にいて、私は（現場から）100㍍ぐらい離れていて、爆弾が落ちた時、あまりの衝撃と音で、カエルが地面にたたきつけられたかのように、その場にいた全員が床に倒れました。

先生は大変だったと思います。あれだけの生徒を、何人かの先生で守っていかないといけないから。飯島さんが亡くなった時、校長先生は本当に気の毒でした。子どもを預かっている責任があるから。

寮で卒業式で終え、荷物をまとめて帰れることになりました。3月で全員引き揚げだと言って。うれしかった、あんなにうれしいことはなかったです。本当に世界が戦争のない、平和であってくれればいいと願います。

（聞き手・藪原麻理子）

学徒動員を体験した伊那高女33回生の有賀ひで子さん